

豊川でエドワジエラ・イクタルリの感染初確認



2018年2月24日（日）新城文化会館会議室で総会が開催され、活動報告。会計監査、2018年度事業計画、予算案が承認されました。

来年度事業計画の主なものはアユ産卵場整備と夏のシンポジウムです。昨年行った産卵場整備（CANも参加「情報誌 CAN」214号 2017年10月）の効果については、親魚となるアユが消えたため産卵自体行われなかったため不明であるとのことです。

昨年春（2017年）のアユ遡上は豊川も矢作川も順調と伝えられました。しかし、どちらの川も魚影がなく釣れない状況であったようです。しかし、大量死事故などもなくどこかへ“消えた”のです。

最近のアユ減少については外来魚による被害が疑われ（「情報誌 CAN」213号 2017年6月）捕獲調査が予定され予備調査にはCANも参加しましたが、結局、手続きが遅れたため実施されませんでした。

しかし、この日の総会で新たな疑惑が…。エドワジエラ・イクタルリの感染が豊川で初めて確認されたことから、アユ減少の原因の一つではないかとの疑いがでてきたのです。豊川においても遡上アユ減少に伴い漁協により琵琶湖産アユの放流が行われていますが、この鮎にまぎれて感染ナマズが持ち込ま

れた可能性が指摘されました。このため 2018 年度も琵琶湖産アユ放流が計画されているのが問題視されました。しかし、河川管理者（国、県）、漁業関係行政からは詳細情報が一切出されないのが漁協、市民としてはほとんど何もわからない現状であるとのことです。

事務局：山本孝之

エドワジエラ・イクタルリとは～岐阜県水産研究所
<http://www.fish.rd.pref.gifu.lg.jp/gijutsu/edwardsiella/edwardsiella.htm>

エドワジエラ・イクタルリ感染症とは？

- ・ 細菌（*Edwardsiella ictaluri*）による感染症です。
- ・ この細菌は、海外のナマズ類の病気の原因菌として知られていましたが、平成 19 年に国内の河川におけるアユ死亡魚から検出されました。
- ・ この細菌は、国内のアユにも病原性を示すことが実験により確認されています。
- ・ アユの場合は、夏場の水温の高い時期（水温 20℃以上）に発症しやすい病気です。
- ・ この細菌に感染した魚を食べても、人体に影響はありません。アユから分離されたエドワジエラ・イクタルリは、37℃では増殖しないことが農林水産省により確認されており、これまでに人に害を及ぼしたケースは 1 例も報告されていません。

エドワジエラ・イクタルリ感染症の症状は？

- ・ アユの場合は、目立った症状を示さないケースも多くありますが、以下のような症状を示すことがあります。
- ・ 腹部がふくれる。血液の混じった腹水が貯まる。
- ・ 眼球が突出する。
- ・ 体表や肛門部が赤くなる。
- ・ 体表に小さな出血斑が多数現れる。

この感染症の被害を抑制するためには、漁業者や遊漁者の方々のご協力が不可欠です。他の河川で漁獲したアユを持ち込まない、漁獲したアユを他の河川へ持ち出さないよう、より一層のご理解とご協力をお願いします。